

装置としても機能するのである。野入直美はイギリスの公教育におけるこの構造をいち早く指摘しており（野入，1998），筆者もまたアメリカの多文化教育がナショナリティという枠組みを維持することの意味をこの角度から考えてきた（岡本，2006a；2006b）。また塩原良和はオーストラリアにおける，ネオ・リベラリズムと多文化主義の融合の様態を論じ，そこからむしろ対抗原理としての多文化主義の復権の方途を模索している（塩原，2005）。

多文化主義に基づく教育が共生社会の実現に寄与することがあるとすれば，それは社会的な多様性に気づかせ，それを表現し，推進するとともに，個人の中の多様性に気づかせ，それを表現し，推進するという点においてである。個人の中の多様なチャンネルが社会の多様な側面と接続されていくことによって，ジョン・トムリンソンのような，「グローバル化した世界を「他者のない」世界として捉える鋭い認識」と「多くの文化的他者から成り立つものとして世界を捉えようとする意識」を同時にもつこと（Tomlinson, 1999, pp. 194-198=2000, pp. 335-342）が可能になるのであり，そのことが，個人化された人びとが再び繋ぎ直される契機にもなる。「共生教育」と呼ばれる教育的営みが追究する理念と実践は，この水準のものであると願いたい。

参考文献

- Beck, Ulrich 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局。)
- Giddens, Anthony 1998, *The Third Way: The Renewal of Social Democracy*, Cambridge: Polity Press. (=1999, 佐和隆光訳『第三の道——効率と構成の新たな同盟』日本経済新聞社。)
- 2000, *Runaway World: How Globalization Is Reshaping our Lives*, NY: Routledge. (=2001, 佐和隆光訳『暴走する世界——グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社。)
- 野入直美 1998, 「多文化教育とナショナル・アイデンティティ」, 中島智子編『多文化教育——多様性のための教育学』明石書店, pp. 133-160。
- 岡本智周 2006a, 「多文化教育と日系アメリカ人のナショナルアイデンティティ」『筑波教育学研究』4。
- 2006b, 「2000年代の米国歴史教科書における多文化社会の根拠——「国家安全保障」と「市民的自由」に関する記述を事例として」『共生教育学研究』1。
- 塩原良和 2005, 『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義——オーストラリアン・マルチカルチュラリズムの変容』三元社。
- Tomlinson, John 1999, *Globalization and Culture*, IL: University of Chicago Press. (=2000, 片岡信訳『グローバリゼーション——文化帝国主義を超えて』青土社。)
- 上野千鶴子 2005, 「脱アイデンティティの理論」, 上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房, pp. 1-41。